第23回地域医療現地研究会に参加して
「国保直診を核とした地域包括医療・ケアの実践」
空・山・川のふれあいのある美しいふるさと
ー住む人々の暮らしを守るー
＜和歌山県・紀美野町＞

国診協地域医療・学術委員会委員／千葉県・鋸南町国保鋸南病院長
金親正敏

国診協の第23回地域医療現地研究会は、平成21年5月21日(木)～22日(金)の2日間、和歌山県紀美野町で開催され、北海道から鹿児島まで、全国の国保直診の仲間245人が参加した。

研究会担当の紀美野町は大都市大阪に、県都和歌山に隣接する和歌山県北部に位置する町であるが、また、世界遺産霊峰高野山への西の表詣道として栄えてきた町で、地域自体が遺跡のうえにあり、周辺は山深い自然のまま残された山間の地でもある。この紀美野町における国保野上厚生総合病院と国保診療所6か所を中心にした地域包括医療ケアシステムの実践は国診協からも高い評価を受けている。今回は、地域医療ケアとはかく実践するのか、その実情を視察、研修する機会を得たので、そのありのままを報告する。

研修前日－5月20日(水)

羽田空港より関西国際空港へと空路参加した。飛行機に乗ると客室内は異様な空気に包まれていた。折からの、大阪の高校での新型インフルエンザ集団発生の

写真1　ホテルの外にはヨットハーバー

写真2　開講式・全体討議会場のロイヤルパインズホテル

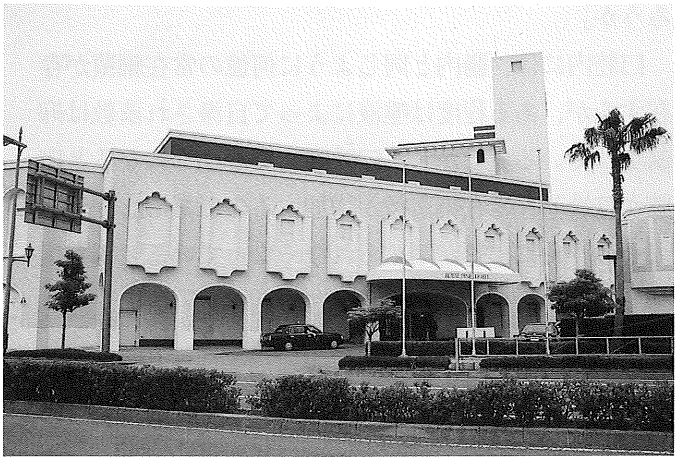


写真３　開講式

写真４　開講式場入口に用意されたウエルパスとマスク

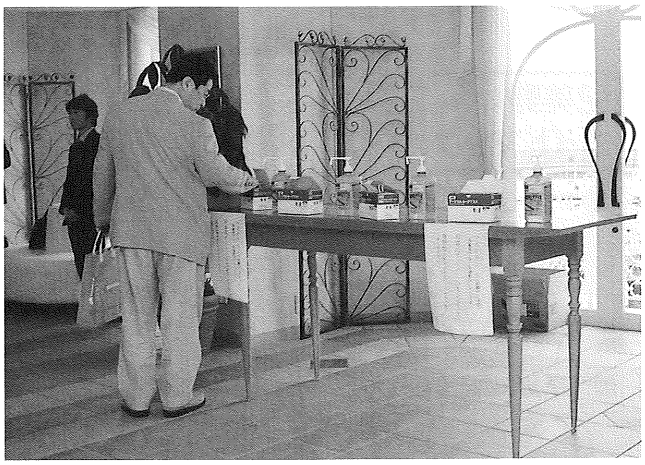


写真５　施設視察研修も全員マスク着用で

ニュース（元は関西空港かとの噂）もあり乗客のほぼ全員がマスク着用の姿であった。私のポケットにも５枚の予備が。関西空港駅から電車に乗り継ぎ海南駅に着くと、地元では誰もマスクは着用しておらず、奇異の眼で見られた。関西人の気質が感じられた。

海南より車で20分、国保野上厚生総合病院附属看護学校で国診協の地域医療・学術委員会の会議に参加したあと、寺本光嘉・紀美野町長自慢の（町中心よりバスで20分）「美里温泉かじか荘」に泊めていただいた。山深く、川沿いのかじか鳴く澄み切った静かな場所で温泉につからせていただいた

研修１日目－５月21日（木）

［開講式］

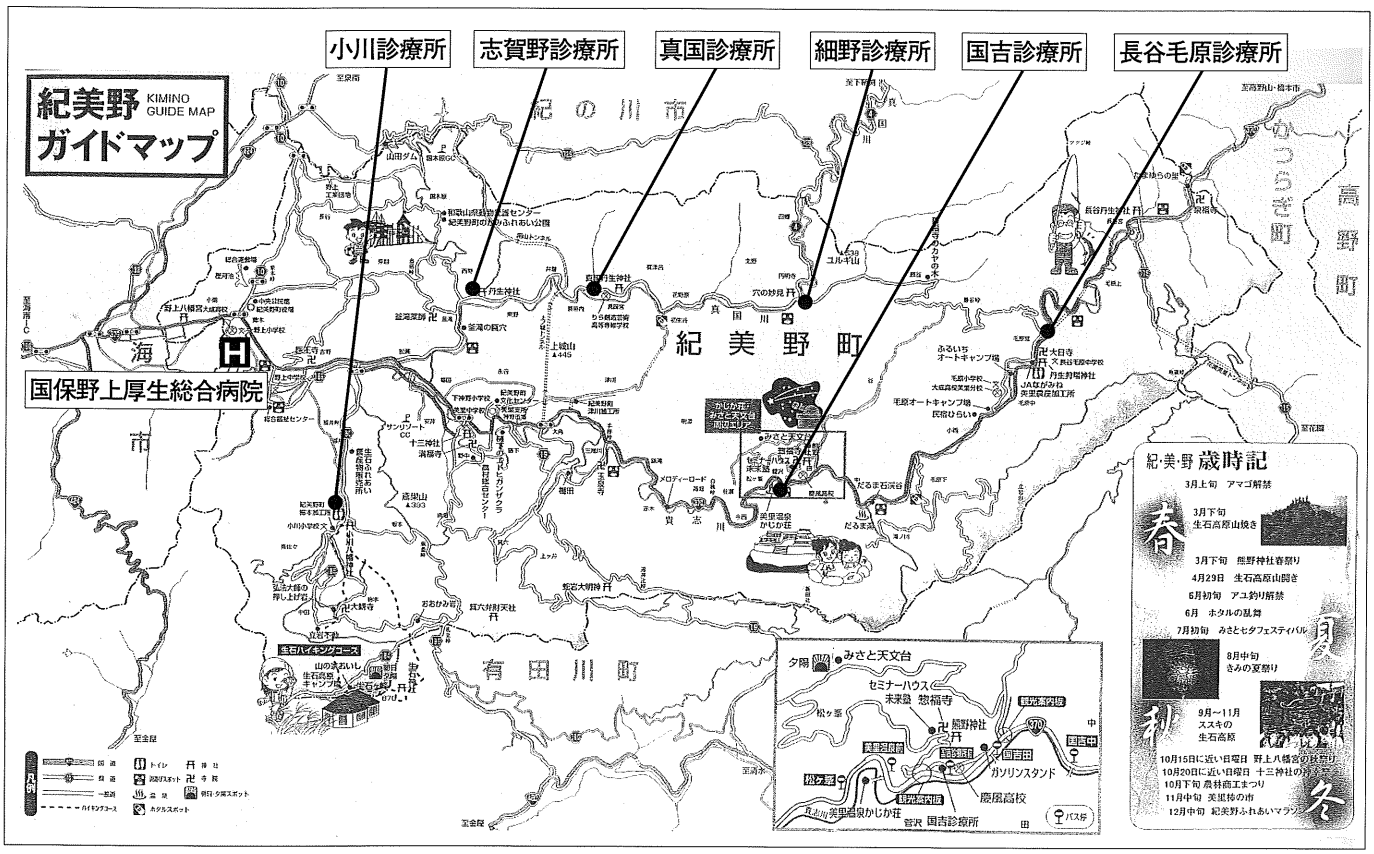
海南市と和歌山市の境の海岸に造設されたマリーナ（写真１）に建つ「ロイヤルパインズホテル」（写真２）にて、午前10時30分より開講式が行われた（写真３）。

今回、開講式を含めすべての会場、研修施設で参加者全員にマスク、ウエルパスの準備をしていただくなど研究会を準備された和歌山県の方々の突然のご苦労に感謝した（写真４・５）。

開講式はまず初めに、主催者として国診協の冨永芳徳会長から、「国診協・国保直診は、これまで一貫して地域包括医療の実践と地域包括ケアシステムの構築を理念として、行政と一体となって保健・医療・介護サービスを提供して地域づくりに貢献してきた。地域住民の健康を守ってきたことは私たちの誇りであり、各病院はすでに国診協において作成した『国保病院の改革の手引き』を参考にしていると思う。今回、紀美野町で行われる現地研究会では、変革期における地域包括医療について建設的な討議が行われることを期待する」と挨拶があった。

次に寺本町長から、生命の源であり人々の心を癒し、育んでくれる豊かな自然とともに生きる紀美野町への現地研究会参加者へ歓迎の挨拶があったあと、来賓の武田俊彦・厚生労働省保険局国民健康保険課長からは、新型インフルエンザについて国保直診各病院の協力への感謝があり、「今後も行動計画は日々変化があるの

図　紀美野町全域図と医療機関の配置



で厚生労働省ホームページで確認していただきたい、また、この研究会での成果を地域に戻り生かされることを期待する」と挨拶された。次に、和歌山県知事代理の坂本和彦氏が歓迎の挨拶をされ開講式を終わり、概要説明に。

［研修施設概要説明］

阿河良廣・国保野上厚生総合病院長は、古く平安の昔、石清水八幡宮の荘園として存在し、空海が高野山に金剛峯寺を開基したあと参詣道として栄えた紀美野町の自然についての案内に引き続き、紀美野町の国保野上総合病院と関連４国保診療所および町直営２国保診療所を中心とした地域包括医療・ケアシステムの現状について豊富な資料で概要を説明された。町直営の２国保診療所の取り組みついては、翌日の全体討議で国吉診療所長の岡地英紀氏より詳しく発表があること、また、残念ながら６へき地診療所については道路事情等により会場発表とするとした（図）。

写真６　国保野上厚生総合病院

●**国保野上厚生総合病院**（写真６）

＜沿　革＞

・昭和24年１月　国保野上厚生病院が現在地に設立、一般24床

・昭和52年７月　一般113床、結核53床、伝染25床、精神100床、計358床に

・昭和53年４月　へき地中核（現拠点）病院に指定さ

写真７　総合福祉センター（左）と「やすらぎ園」（右）

写真８　総合福祉センター内のプレイルーム

れる

・平成10年８月　本館新築、病床数：一般100床、医療療養型54床、結核53床、伝染18床、精神100床、計325床（平成11年３月伝染病棟廃止、計307床に）

・平成11年４月　訪問看護ステーション、在宅介護支援センター開設

・平成12年４月　居宅介護支援事業所開設

・平成18年７月　精神障害者福祉ホームＢ型開設

10月　障害者自立支援法指定相談支援事業

＜診療科＞

内科・外科・整形外科・神経精神科・眼科・産婦人科・リハビリテーション科・耳鼻咽喉科・泌尿器科・脳神経外科

＜職員数＞

医師14名、看護師123名、コ・メディカル31名、その他74名

●紀美野町総合福祉センター（写真７）

・平成16年４月５日会館

町民の総合的な福祉の充実と健康づくりを図り、保健福祉サービスを推進する。

福祉業務、保健衛生、介護保険業務、地域包括支援センター、社会福祉協議会（デイサービスセンター・ヘルパーステーション・居宅介護支援事業所）

●介護福祉老人施設「やすらぎ園」（写真７）

昭和47年、海南市と紀美野町（合併前１市３町）で構成する一部事務組合立、定員50名の特別養護老人ホームとして開設。平成16年２月に移転改築、集団ケアから全個室ユニットケアへの転換を図る。

●国保野上厚生総合病院附属看護専門学校

平成19年４月、附属准看護学校を閉校し、附属看護専門学校（看護師３年課程）を開設。専門職者としての看護実践能力の育成、人間としての品位を身につけた看護師の育成、社会の変化をとらえ、貢献できる能力の育成。

入学定員40名、在校生：女89名・男28名の計117名

［施設視察研修］

昼食後、参加者は５班に分かれ会場よりバスにて施設視察研修に向かった。

２班視察コース：総合福祉センター→やすらぎ園→野上厚生総合病院→附属看護専門学校→万葉館→ホテル（交流会会場）

●総合福祉センター

開かれた機能として、３歳以下の子どもさんなら自由に利用でき、親御さんの交流の場にもなっている広いプレイルーム（写真８）、トレーニングセンターを有し、町内の開業医、海南市の小児科医による各種検診の場として、またフッ素洗口など歯科医療、町保健福祉事業の拠点であった。さらに、センター内に設けられている介護の中心施設として、デイサービスセンター・ヘルパーステーション・居宅介護支援事業所を見学。

写真9　キッチンのある共同生活室（左）の周囲には個室が並ぶ

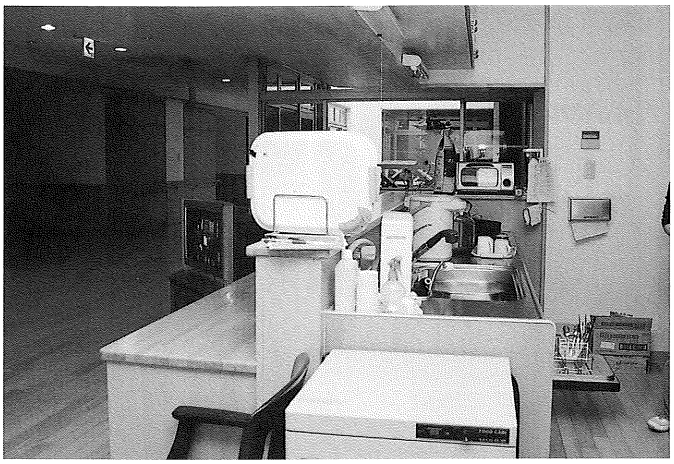


写真10　本格的な設備を備えた理容室

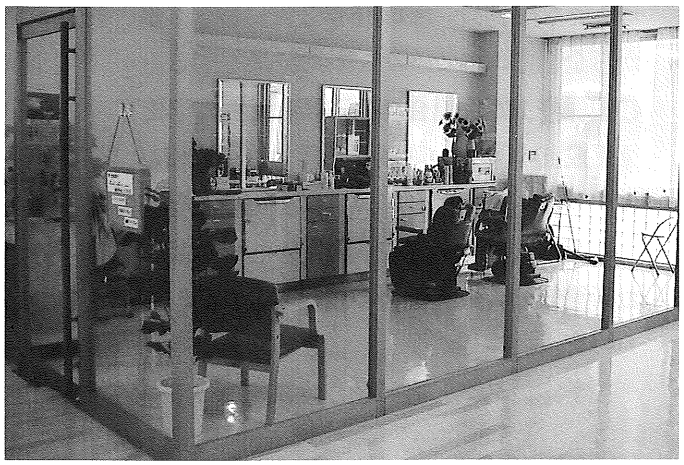


写真11　喫茶室・レストランは夜になると居酒屋に

●やすらぎ園

海南市と紀美野町の一部事務組合での開設で、全個室ユニットケアの介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）である。できてまだ3年の新しい施設でもあり、とてもきれい。1ユニットは6～7名で構成されダイニングキッチン（共同生活室）を中心に個室が配置され（写真9）、個室は使い慣れたものを持って入居できる。毎週3日、午後には理容室が営業（写真10）。喫茶レストラン・居酒屋も備え（写真11）、個人の嗜好に応じ、面会者といっしょに食事、会話ができる。また職員も若々しくきびきびして気持ちがよい。

●野上厚生総合病院

◇看護部活動、地域とふれあう看護活動：公開講座1回／年、ふれあい看護体験、病院体験学習（高校1年生）、職業体験（中学2年生）、1日町の保健室（看護協会に協賛）。

◇看護体制：チームナーシング＋受け持ち制、3交代、看護職員、保健師3名、助産師4名、看護師108名、准看護師12名、看護補助者27名

◇訪問看護ステーション：保健師1・看護師2のスタッフで訪問患者数44名。町内開業医との協力が国保病院医師の主治医より多かった。訪問看護終了者は悪化入院35％、介護難入院・入所12％、軽快終了10％、急変入院8％であったが約30％を在宅で看取っていた。

◇栄養課の取り組み：NST活動、地域住民との研修交流会などの取り組み、精神科病棟（栄養過多）へのOTと協力した取り組みなどの説明。

◇リハビリテーション科：訪問リハビリの先進的取り組みを中心とした説明などがあった。

◇精神科デイケアと作業療法の取り組み：野上総合病

写真12　附属看護専門学校の図書室

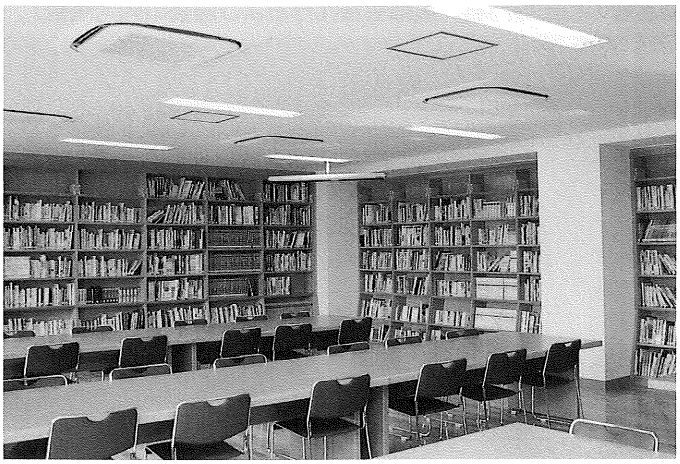
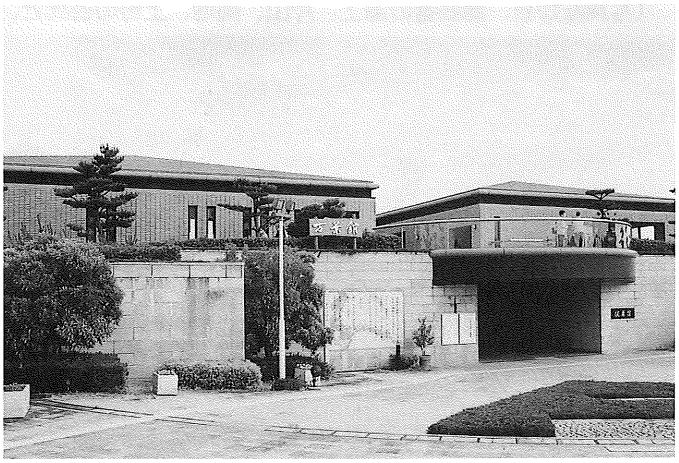


写真13　名勝・和歌の浦に建つ「万葉館」



院は精神科、福祉ホームB型を持ち、いままで一般病院を中心として視察してきた現地研究会としては興味深く、海南市を含めた広域地域との関わり、OTによる生活に密着した取り組みが新鮮であった。

◇**居宅介護支援事業所**：国保病院内に居宅介護支援事業所を直接持つのはめずらしい。6診療所、訪問看護、訪問診療と一体になった国保野上総合病院を中心とした町の包括医療介護への取り組み方が感じられた。

●附属看護専門学校

年間行事は2泊3日の新入生合宿研修で始まり、共同生活をとおして学生の自主、自立をめざす。5月には看護の日記念行事、オープンキャンパスを経て、2年生で国際看護（デンマーク研修、参加12名）があり、福祉の先進国デンマークにおいて看護実習、福祉・医療施設の視察、看護学校訪問を行う。充実した設備環境のもとで学ぶ看護師の卵が大事に育てられているようだ（写真12）。

視察研修を終え交流会までのひととき、『万葉集』にも数多く詠われている和歌山市の名勝・和歌の浦にある「万葉館」（写真13）にて、いまに通ずる歴史の深さを感じさせていただいた。

その後、18時30分からはロイヤルパインズホテルにおいて地域医療交流会が行われた。地酒が飛ぶように売れ、会場各所で熱い意見の交換が夜遅くまで花咲いた。終了後、タクシーで和歌山ラーメンを食べに出かけられた方もいたようである。

朝起きるとホテルの窓からヨットハーバーが一望され、まるで地中海での目覚めのようであった。

研修2日目－5月22日（金）

［全体討議］

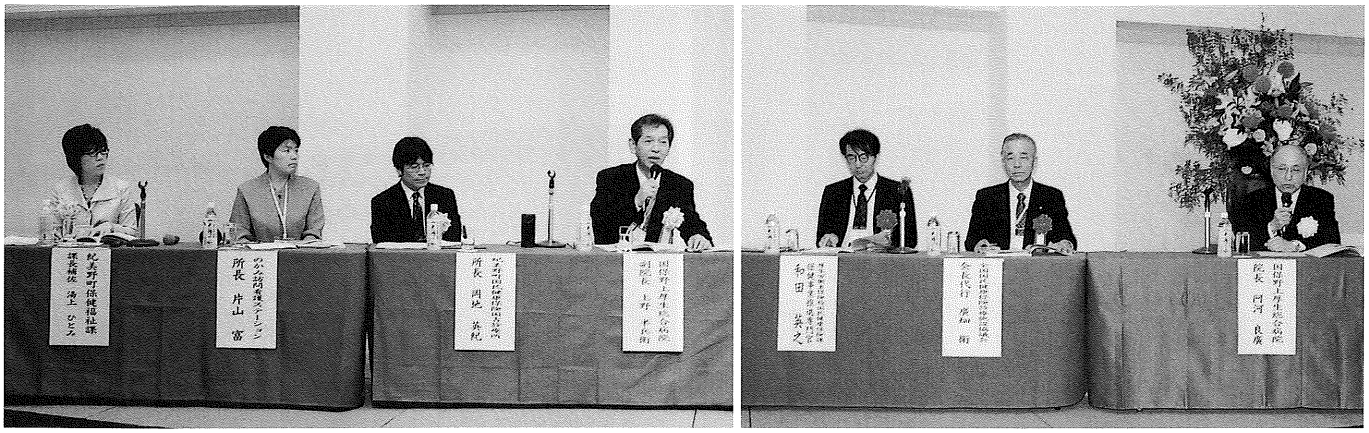
9時30分より全体討議が開催された（写真14）。まず、座長を務める阿河良廣院長の、「今回、われわれはメインテーマに『空・山・川のふれあいのある美しいふるさと　ー住む人々のくらしを守るー』と掲げたが、全国の国保直診にとっての普遍的なテーマでもある。全国の国保診療施設はいずれも美しい空・山・川を持っていると思う。そして、その地域の住民を守っているわけだが、今回。全体討議では4つの異なった視点から地域住民の健康・暮らしを守る活動を発表してもらい、そして討議、最後に厚生労働省の和田英之専門官、国診協の廣畑衛会長代行に助言をいただく」との言葉で始まり、4人のパネラーから発表した。

○第1席「当院の在宅ケアの現状と公立病院としての今後の取り組み」

上野半兵衛・国保野上厚生総合病院副院長

平成16年以降の医師4名の退職に伴い外来・入院とも減少し赤字経営に転じ、経営不安を感じている。在宅ケアは、へき地拠点病院として4診療所に週1回午後半日、医師、看護師、薬剤師を派遣している。それ

写真14　全体討議の模様
（写真左から、発表者の湯上。片山、岡地、上野の各氏と、助言者の和田専門官、廣畑会長代行および座長の阿河院長）



ぞれの診療所の延べ患者数は、平成20年度は142名から353名と多くはないが、住民からは喜ばれている。これら診療所とは別に、病院が町の西端にあり、奥に向かって谷沿いにくねくねした道が続いているが、その1つの谷沿いにある長谷毛原診療所には岡地医師が常駐し、同じ谷沿いの国吉診療所にも岡地医師が出張診療している。訪問診療は内科、整形外科を中心に月70～80件こなしている。また介護老人福祉施設「やすらぎ園」には月20～25件の往診を行っている。

コ・メディカルを中心とした在宅ケア活動としては、訪問看護ステーションは24時間対応で、平成20年度の訪問実績は4,292件。また居宅介護支援事業所に3名を配置、月平均約90件のケアプラン作成を行っている。さらに、理学療法士5名での訪問リハビリは20年度に2,128件である。そのほか、障害者相談支援事業がありPSW1名、知的障害、身体障害、精神障害について在宅ケアを支援する事業である。

今後の取り組みとしては、紀美野町の高齢化率35.3％ではあるが、若年者の多い海南市にも隣接しておりそこまでを診療圏と考え、①医師不足のため地域の医療機関との連携をとり在宅医療・ケアを推進する、②赤字経営で厳しい状況ではあるが、地域包括医療・ケアを実践していく、③地域外の高齢者も対象として、認知症をはじめとする精神疾患を有する高齢者の医療ケアに特化して提供していきたい。いま精神病棟の新築工事を行っており22年秋に完成予定。地域の医療機関や行政、老人施設との連携を深めあっていく。

○第2席「診療所の紹介」

岡地英紀・紀美野町国保国吉診療所長

月曜全日と水曜の午前、金曜の午後は国吉診療所、火曜全日と水曜の午後、金曜の午前は長谷毛原診療所と2診療所を掛け持ちで診療、木曜日は各種検診、学校保健、往診、胃カメラ検査などにに充てている。スタッフは看護師3名、事務2名。往診件数は多く車の入らない場所に住む住民もあり、車で行けるところまで行き、あとは徒歩でというケースもある。高齢者が多く高齢化率は5割を超えている。

地域の診療所の役割は医療というジャンルを問わずに、一人ひとりに丁寧に向き合っていくことではないだろうか。そこで現在、訪問に力を入れている。診療所を開けているだけでなく、医師と看護師が各家庭を訪問している。当診療所はお金にならないことを一生懸命やりたい。その一環として最近は健康教室も開催、私自らと看護師さんたちで演劇を演じている。

○第3席「在宅で見取るための看護師の役割と心構え」

片山　富・のかみ訪問看護ステーション所長

訪問看護ステーションの10年間の活動で、訪問終了者236名のうち76名、約30％を看取ることができた。看取りに関与した医師に関しては、当初は病院が多かったが、平成16年以降は開業医が多くなっている。また、訪問終了者の状態悪化、急変時の対応医師は7割が病院であった。開業の医師のほとんどは紀美野在住

でなく、看取りには深夜でも和歌山市から駆けつけるが、急変増悪時はあらかじめ家族と相談し病院で受け入れている。在宅での看取りには主治医、家族、看護師がそれぞれ敬虔な気持ちで、その人らしい生を全うすることを目的に支援することが大切だと考える、また信頼関係を結び支えることが訪問看護師の責務であるとした。

○第4席「紀美野町地域包括ケアの取り組み－認知症の取り組みを中心に－」

湯上ひとみ・紀美野町保健福祉課課長補佐

紀美野町の人口は平成21年4月現在で1万1,213人、高齢化率36.4%、一世帯あたり平均2.4人である。保健師は総合福祉センターに本年4月より8人全員が集まる集中配置方式となった。

本町では、平成16年から和歌山県の高齢者虐待モデル事業に参加した。高齢者の虐待にどのように取り組んでいくかを考えた際、人権を守るということから考えていくことにし、「高齢者の尊厳あるまちづくり」を進めてきた。そのため、高齢者のケアネットワーク委員会を立ち上げた。病院の医師や開業医との連携も進めていたが、とくに警察署、郵便局、消防会などとの連携が強化されたことが実感できた。地域包括支援センターに子どもであっても、女性であっても、虐待の窓口を一本化した。虐待予防のためには認知症への理解が重要であることから、国の「認知症を知り地域をつくる10か年」に参加、運動の一環として、連携機関（老人クラブ、郵便局員など）を対象に認知症サポーター養成講座を開催してきた。認知症の予防活動としては和歌山県、県立医大が開発した「地域事業所における認知症予防プログラムの方法」に沿って、昨年度6回、認知症予防教室を開催した。認知症ケアの質を高めるには、認知症介護研究研修・東京センターの「センター方式」を活用している。そのほか一人暮らしの高齢者などを訪問する「話し相手ボランティア」も立ち上げて、幅広い活動を展開していた。

4名の発表を受け、まず助言者として和田英之・厚生労働省保険局国民健康保険課保健事業推進専門官は、野上厚生総合病院の検診事業実績から、平成20年度に特定健診・特定保健指導が始まってもそれまで以上に従来の保健事業に取り組んでもらっていることに感謝し、また岡地先生のへき地診療所の活躍に賛辞を贈られた。行政の取り組みとして首長の理解のもと、国保直診と保健事業が車の両輪の関係で進んでいけば、すばらしい。特定健診、保健指導の義務化、安心・信頼の医療と予防の重視は、まさに国保直診での取り組みが法制化、地域に広げられたものであると発言された。

次に廣畑会長代行より、野上厚生総合病院を中心とした、へき地への地域包括ケアの取り組みはすばらしいと話され、看護学校の運営は看護師不足に悩んでいる病院にとっては示唆に富むものであった。一昨年から公立病院改革が注目されているが、国診協としては地域の永続性を確立する立場での改革を前面に打ち出してもらいたい。岡地先生のとにかく訪問をして住民のニーズを把握するということは、都会であれ田舎であれ同じで、全住民のカルテをつくる気概で取り組んでもらいたいと会場に訴えられた。片山さん、湯上さんの活動にも賛辞を送られ、阿河先生をはじめみなさんが日常のことを力まず何気なくこなしている、それが紀美野町で良質でレベルの高い地域医療・ケアになっていることにおおいに励まされたとお礼の言葉で結ばれた。

［閉講式］

以上で、第23回地域医療現地研究会の全スケジュールを終え、閉講式が行われた。閉講式では青沼孝徳副会長の閉講の挨拶のあと、平成22年度の次期開催地、香川県・綾川町国保陶病院の大原昌樹院長が第24回現地研究会にも多くの参加をと呼びかけた。

こうして、第23回目を迎えた現地研究会は成功裏に幕を閉じた。

■

最後に、現在も危惧されている新型インフルエンザ騒ぎのなか、今回の現地研究会を無事終えられた和歌山県のみなさんの運営努力に心から感謝いたします。私を含め参加者はみな、紀美野町に負けじと心に誓って帰路についたことと思います。